

年間活動報告

【2019年度】

・本報告は、『千總文化研究所 年報』第2号（2021年4月）に掲載した内容の内、以下の概要を抜粋したものである。

当研究所が主催した研究会および講演会等
展覧会への出陳協力

当研究所の所員が実施した、講演および発表などの教育・研究活動

- ・講演会および研究会の登壇者の所属、役職は、開催当時のものを表記する。
- ・掲載画像の無断転載を禁止する。



[研究会]

京都の伝統技術を未来へ繋ぐプロジェクト

研究発表1

「古法と現法による染織原材料の特性の違いについて —生糸の製糸・製織方法を中心に—

日時：2020年2月13日（木）午後2時～午後4時

会場：千總本社ビル5階ホール

講師：東京文化財研究所 保存科学研究センター修復材料研究室 室長 早川典子

東京文化財研究所 無形文化遺産部 主任研究員（当時） 菊池理予

参加者：染織品製作従事者 11名

研究発表2

「**アクリル板とデジタル技術を用いた夾纈^{きょうけち}染めの復元研究**」

日時：2020年2月28日（金）午後2時～午後4時

会場：千總本社ビル5階ホール

講師：神戸芸術工科大学 教授 ばんばまさえ

参加者：染織品製作従事者12名

[概要]

伝統的な染織技術において使用される材料と道具は、近代を境にして大きく変化しました。染料は天然染料から化学染料へ、蚕はより長くて太い糸を吐くように品種改良がなされ、製糸は手作業から機械が主流となりました。技術研究を目的とした近代以前の染織品を復元製作する際に課題となるのが、そうした染料、繭の種類、製糸・製織方法の違いです。道具と材料の違いが、染織品の仕上がりに大きく影響するためです。機械化が進み効率化された一方で、表現できなくなった色合いや風合いもあります。

千總が2015～2017年にかけて手がけた重要文化財〈束熨斗文様振袖〉（18世紀）の復元製作においては、天然染料を用いた色彩の再現が試みられたものの、絹に関しては現代の繭の種類、製糸・製織方法を用いて、可能な限り江戸時代の生地の風合いに近づける手法に止まりました。風合いの差異の検証は、染料の発色との関係と合わせて課題として残りました^{*1}。また2017～2019年にかけて取り組んだ桶出絞りの技術調査においては、生産者を失った道具である桶と技法の特性についての記録作成は行われましたが、道具の復元製作や代替えの道具の検証までは至っていません^{*2}。

大量生産・大量消費の社会的風潮が終焉を迎えつつある昨今、技術とともに道具と材料の特性を改めて検証することも、伝統の技をよりよい形で継承するために必要です。染織

技術の可能性を再考するため、専門家を招聘して2つの研究会を開催しました。

両研究会は文化庁2019年度文化芸術振興費補助金「地域と共働した博物館創造活動支援事業」のもとに実施しました。

*1 千總文化研究所 第2回研究会「日本の染色—その色と技—」『千總文化研究所 年報』2020年1月, pp.52～61, および第3回特別鑑賞会・講演会「千總友禅—束熨斗文様振袖の復元製作を巡って—」『千總文化研究所 年報』2020年1月, pp.108～115.

*2 千總文化研究所「桶出絞りの技術継承プロジェクト」『千總文化研究所 年報』2020年1月, pp.84～85.

〔研究会〕

京都の装束文化の魅力を再発見プロジェクト

日時：2020年2月25日（火）午後2時～午後5時

会場：千總本社ビル5階ホール

研究発表

「真宗大谷派の歴史と文化 —— 姫路船場別院本徳寺と東本願寺の関係性を中心に」

同朋大学仏教文化研究所 所長 安藤 弥

調査報告

「姫路船場別院本徳寺所蔵の千切屋惣左衛門が手がけた染織品について」

真宗大谷派 圓正寺 住職 山口昭彦

中世日本研究所 所長 モニカ ベーテ

千總文化研究所 所長 加藤結理子

参加者：装束文化研究者、染織研究者、寺院関係者、法衣製造業者など27名

〔概要〕

真宗大谷派姫路船場別院本徳寺（以下、船場本徳寺）に遺されている染織品100余点の調査報告として開催しました。調査は、江戸時代後期から大正時代の袷裳、法衣、打敷を対象として、撮影、採寸（一部）を行い、調書を作成しました。たとう紙に包まれた装束の中から、「御装束師千切屋惣左衛門」として当時の千總が手掛けたと考えられる装束を13点確認しました。

また今後の研究を視野に、千總に残されている江戸時代から大正時代にかけての袷裳をはじめとする装束の図案200点余と、打敷と水引の図案90点余の撮影、採寸、墨書の翻刻も行いました。

研究会では、2009年より船場本徳寺の文化財を調査し、史料の展示公開に取り組んでいる安藤弥氏が、船場本徳寺と東本願寺との密接な関係とその歴史、宮中からもたらされた文化や地域社会とのつながりについて講義しました。調査報告では、山口昭彦氏が袍裳、五条袷裳、畳袷裳、輪袷裳などの装束の着用シーンと色や素材の使い分けと意味について、モニカ ベーテ氏が、八藤や牡丹など真宗大谷派に特徴的な文様を中心に、その形のヴァリエーションや生地組織の違いを千總の史料との比較と共に解説しました。

今後も真宗大谷派寺院が所蔵する史料と千總の史料の比較と体系的整理を継続し、御装束師の活動を明らかに

するとともに、背景にある歴史・文化とともに装束の地域文化資源化を目指します。

2019年度文化庁文化芸術振興補助金「地域と共働した博物館創造活動支援事業」のもと実施いたしました。

【プロジェクト共同研究者（順不同・敬称略）】

- ・真宗大谷派圓正寺 住職 山口昭彦
- ・同朋大学仏教文化研究所 客員所員 青木 馨
- ・中世日本研究所 所長 モニカ ベーテ
- ・中世日本研究所 宮尾素子
- ・大阪芸術大学 講師（当時）小出祐子
- ・京都文化博物館 学芸員 林 智子

[特別鑑賞会・講演会]

千總コレクションと共に、日本文化の未来を考える 第5回

「千總と美術染織―新たな時代に求められた美と技―」

日時：2019年7月27日(土)午後2時～午後3時30分

会場：千總本社ビル5階ホール

[概要]

急速な近代化・西欧化を遂げた明治時代から昭和時代初期にかけて、「美術染織」と呼ばれる工芸分野が一世を風靡しました。絵画のような図様を、染めや織りの技法で表し、大きな額や衝立などに仕立てたもので、洋風の室内を装飾するために製作され、海外でも人気を博しました。

千總は、大きな社会変動に伴い京都の染織業界が打撃を受ける中、天鷲絨友禪の創案や日本画家の起用など、従来の友禪染や刺繍の技術を発展させ、美術染織の礎を築きました。

宮内庁三の丸尚蔵館より太田彩氏を迎え、当時の宮内省から御下命を受けて千總が手がけた作品を中心に、美術染織の隆盛と歴史的意義について伺いました。

当時の宮内省に納められた〈天鷲絨友禪「嵐ノ図」掛幅〉(1903)の原画・木島櫻谷〈猛鷲図〉(1903)、〈塩瀬友禪に刺繍「薔薇に孔雀図」掛幅〉(1882頃)の下絵、当時の写真資料などを展覧しました。

[講師]

太田 彩(おおた あや)

宮内庁三の丸尚蔵館 学芸室主任研究官(当時)。鳥取県生まれ、奈良大学文学部文化財学科卒業。奈良国立博物館学芸課非常勤職員を経て、現職。皇室伝来の美術品類の調査と保存に携わり、《動植練絵》30幅修理事業にも関わる。主な論文・著書は『伊藤若冲 作品集』(東京美術)、『小栗判官と照手姫』(東京美術)、「伊藤若冲と『動植練絵』」「若冲、描写の妙技」(『伊藤若冲 動植練絵 全三十幅』小学館)、「近世宮廷美の担い手と底力」(京都国立博物館『京都御所ゆかりの至宝』展図録)、「《万国絵図屏風》がもたらした成果と課題」(サントリー美術館・神戸市立博物館『南蛮美術の光と影』展図録)など。

[特別鑑賞会・講演会]

千總コレクションと共に、日本文化の未来を考える 第6回 「千總と森口邦彦—友禪の魅力とともに—」

日時：2020年1月24日（金）午後2時30分～午後4時

会場：千總本社ビル5階ホール

[概要]

友禪染は、江戸時代中頃より発達した染色技法です。糊防染を用いることで繊細な文様も、絵画のように写実的な図柄も自由自在に再現できるため、今日に至るまでさまざまな表現が生み出されてきました。

重要無形文化財「友禪」保持者である森口邦彦氏は、「蒔糊」と呼ばれる細かな粒状の糊を用いたグラフィカルな文様で友禪の可能性を追求されてこられました。一方、千總は「糸目糊」と呼ばれる細い輪郭線を用いた具象的な文様の美を受け継いできました。

時代や社会の変化を乗り越える、したたかな友禪の魅力とはなにか。当研究所理事でもある森口氏が願う「文化の未来」―。それは「ものづくりを通じて、文化の異なる人々が違いを尊重しつつ、共に持続可能な社会を築くこと」。友禪を一つの切り口としながら、伝統を継承すること、新しいものを創造すること、美を追求することなど、ものをつくることへの思いを伺いました。

森口邦彦氏の作品〈開花〉、父・森口華弘氏による黒留袖、色留袖、千總・西村家14代及び15代夫人の婚礼衣装を展覧し、多彩な表情を見せる友禪の着物をご覧いただきました。

[講師]

森口邦彦（もりぐち くにひこ）

1941年、京都生まれ。京都市立美術大学（現京都市立芸術大学）日本画科卒業後、パリ国立高等装飾美術学校でグラフィック・デザインを学ぶ。帰国後、父である森口華弘（1909-2008）の元で友禪の修行を始める。1967年、日本伝統工芸展初入選、以後今日まで連続入選、受賞多数。「蒔糊」の技法を用いた幾何学文様で、友禪染の新境地を切り開いた。

1974年、第21回日本伝統工芸展 鑑査委員就任、以後鑑査委員歴任。2007年重要無形文化財「友禪」保持者（人間国宝）に認定される。

フランス、スイス、デンマーク、イギリスにおいて個展を開催し、作品は国内外の美術館に収蔵されている。1988年フランス政府芸術文化シュヴァリエ章、1992年芸術選奨文部大臣賞、2001年紫綬褒章、2013年旭日中綬章他、受賞多数。2017年3月千總文化研究所設立時より、当研究所理事。



会場風景

社会活動

[講演・レクチャー]

1. 京都工芸繊維大学 サマーセミナー

日時：2019年8月19日（月）午前10時～午後0時

内容：千總の染色技術について

場所：京都工芸繊維大学

対象：学生30名

2. ICOM（国際博物館会議） オフサイトミーティング

日時：2019年9月5日（木）午後2時～午後4時

内容：千總の技術、着物について紹介

場所：千總本社ビル

対象：ICOM, International Committee for Museums and Collections of Costume に参加の約60名

3. 「円山応挙から近代京都画壇へ」展 講演会

日時：2019年11月9日（土）

内容：京都画壇と千總一岸竹堂を中心に—

場所：京都国立近代美術館内ホール

対象：約100名

4. 奈良ホテル収蔵絵画展

「Be Road ～天鷲絨友禪と奈良ホテル110年の軌跡～」

展示期間：2020年2月3日（月）～2月8日（土）（入場無料）

大正時代からホテルのレストランの装飾として使用されていた2点と宿泊客しか目にする事ができない客室の装飾となっている6点が会場に展示された。

講演日時：2020年2月4日（火）午後2時～午後2時30分

場所：奈良ホテル新館「若草の間」

内容：奈良ホテル所蔵の天鷲絨友禪と歴史的背景の解説

現代の天鷲絨生地と製作工程の紹介

対象：約30名

5. ミュージアム日本美術専門家連携実行委員会

（東京国立博物館主催）

日時：2020年2月5日（水）午後3時～午後5時

場所：千總本社ビル

内容：着物づくりの生産体制と手描き友禪の製作工程の解説。

現在の商品と、下絵、白生地、染色道具を展示。

参加者：北米・ヨーロッパのミュージアム日本美術担当者30名

（参加者所属館：Museum Volkenkunde, The Cleveland Museum of Art, Victoria and Albert Museum,

Государственный музей изобразительных искусств имени А.С. Пушкина(Pushkin State Museum of Fine Arts),

Museum of Fine Arts, Boston, and so forth. 他)

[寄稿]

『ふでばこ』新連載「京の美学・日本の心」

・39号「千總の美をめぐって」（2019年10月発行）

・40号「きもをつくること」（2020年4月発行）

展覧会協力

1. 円山応挙から近代京都画壇へ

会場：東京藝術大学大学美術館、京都国立近代美術館（巡回）

会期：東京藝術大学大学美術館：2019年8月3日～9月29日、京都国立近代美術館：2019年11月2日～12月15日

〈出品作品〉

円山応挙筆〈保津川図〉〈写生図巻（甲巻）〉〈写生図巻（乙巻）〉、長沢蘆雪筆〈花鳥図〉、吉村孝敬筆〈水辺群鶴図〉、森狙仙筆〈猪図〉、岸駒筆〈孔雀図〉、岸竹堂筆〈大津唐崎図〉〈猛虎図〉、今尾景年筆〈群仙図〉、木島櫻谷筆〈万壑烟霧〉※展示では『山水図』と表記

2. Kimono Couture: The Beauty of Chiso ※新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の影響により現地展示中止

会場：Worcester Art Museum (USA)

会期：2020年4月25日～2020年7月26日

〈出品作品〉

13代西村總左衛門夫人婚礼衣装〈若松文様打掛〉〈御殿文様打掛〉、

14代西村總左衛門夫人所持〈御簾に扇文様振袖〉〈霞に扇文様振袖〉、

14代西村總左衛門夫人婚礼衣装〈霞に松文様打掛〉、

15代西村總左衛門夫人婚礼衣装〈霞に松文様打掛〉〈松竹梅文様打掛〉、

〈白綸子地甕垂れ文様小袖〉、〈藍綸子地近江八景文様小袖〉、〈白麻地唐扇と花東文様帷子〉、〈白綸子地立ち木の菊に文字文様小袖〉、

〈紫壁縮緬地雲取に琴尽し島原棲文様小袖〉、西川祐信『正徳雛型』、岸竹堂筆〈大津唐崎図〉〈梅図〉、岸竹堂下絵〈舞妓に桜〉〈月に鬮籠〉、

今尾景年下絵〈縮緬地楓に流水文様型友禪裂〉、榎原文翠下絵〈縮緬地松に千鳥文様型友禪裂〉〈縮緬地武具尽し文様型友禪裂〉、

久保田米麿下絵〈縮緬地大津絵文様型友禪裂〉、藤井玉洲下絵〈縮緬地小袖尽し文様型友禪裂〉、

西村總左衛門発行 今尾景年原画『景年花鳥画譜』、ヨウジャマモト〈振袖〉

3. 千總展 画壇と染織 日本の美を描くーデザイン力の根源

会場：高島屋京都店 グランドホール

会期：2020年8月21日～8月26日

〈出品作品〉

岸竹堂下絵〈崖に虎図〉〈柳牡丹に小禽〉〈水中遊鯉〉、今尾景年下絵〈狗兎〉〈柳に鷺〉〈菊に小禽〉、

西村總左衛門発行 今尾景年原画〈景年花鳥画譜〉、裾模様〈梅に源氏窓〉〈正倉院裂〉〈流水に花扇〉、

〈奢侈品等製造販売制限規則第一・第二條第一項但書に依る許可申請書〉、

13代西村總左衛門夫人 婚礼衣装〈松に鶴文様振袖〉〈御殿文様打掛〉

4. Kimono: Kyoto to Catwalk

会場：Victoria and Albert Museum (UK)

会期：2020年8月27日～10月25日

〈出品作品〉

ヨウジャマモト〈振袖〉〈帯〉

5. 江戸の動物絵大集合！猿描き狙仙三兄弟～鶏の若冲、カエルの奉時も

会場：熊本県立美術館

会期：2020年7月18日～9月6日

〈出品作品〉

森狙仙〈猪図〉

[Special Exhibitions and Lectures]

Sixth Special Exhibition and Lecture

Exploring the Future of Japanese Culture with Chiso Collection Chiso and Kunihiko Moriguchi—Fascinations of *Yūzen* Dyeing

Date: Friday, January 24, 2020, 2:30 pm to 4:00 pm

Venue: Chiso Head Office, Hall (5th floor)

Summary

The *yūzen* dyeing technique has been developing since the middle of the Edo era. *Yūzen* dyeing, using a paste resist, can perfectly reproduce intricate patterns and realistic designs comparable with pictures, thus creating a variety of expressions that have been achieved to date.

Kunihiko Moriguchi, a holder of Important Intangible Cultural Property (*yūzen* dyeing), has explored the possibilities of *yūzen* dyeing using fine pellets of resist paste called *makinori* to create graphical patterns. Chiso express the beauty of representational designs by traditionally using *itomenori* (outline paste), which leaves thin outlines on the fabric.

How can we define the appeal of *yūzen* that remains unchanged over the changing times and society? Moriguchi, who also serves as a commissioner of the Institute for Chiso Arts and Culture, hopes that the culture in the future will help build a society where people overcome cultural differences and create a sustainable world together. He shared his thoughts on craftsmanship, focusing on carrying on tradition, developing creativity, and seeking for beauty in the field of *yūzen* dyeing.

At the exhibition, *Kaika* (blooming) by Kunihiko Moriguchi, a *kurotomesode* (a married woman's formal kimono with a black ground) and an *irotomesode* (a married woman's formal kimono with a colored ground) by Kunihiko's father Kakō Moriguchi, and the bridal kimono of the wives of Nishimura XIV and XV of Chiso were displayed to showcase the different expressions of *yūzen* kimono.

Lecturer:

Kunihiko Moriguchi

Kunihiko Moriguchi was born in Kyoto in 1941. After graduating from the Department of Traditional Japanese Painting of Kyoto City University of Arts, he studied graphic design at the *École Nationale Supérieure des Arts Décoratifs* in Paris. He returned to Japan and began learning *yūzen* dyeing techniques under his father Kakō Moriguchi (1909–2008). In 1967, his work was accepted for the first time for the *Nihon Dento Kogeiten* (Japan Traditional Art Crafts Exhibition). Since then, many of his works have been accepted some consecutive times and won prizes in the event. By designing geometric patterns using the *makinori* or sprinkled resist paste technique, Moriguchi broke new ground in *yūzen* dyeing.

In 1974, he was appointed as a member of the screening committee for the 21st Japan Traditional Art Crafts Exhibition, and has been a regular member of the committee since then. In 2007, Moriguchi was designated as a holder of Important Intangible Cultural Property, *yūzen* dyeing, known as Living National Treasure.

He held solo exhibitions in France, Switzerland, Denmark, and the UK. His artworks are stored in museums in and outside of Japan. Many awards that he won include the *Chevalier de l'Ordre des Arts et des Lettres* (Knight of the Order of Arts and Letters) awarded by the French government (1988), the Minister of Education, Science and Culture's Art Encouragement Prize (1992), the Medal with Purple Ribbon (2001), and the Order of the Rising Sun, Gold Rays with Neck Ribbon (2013).

He has served as a director of the Institute for Chiso Arts and Culture since its founding in March 2017.

[Seminar]

Project for Handing Down the Traditional Techniques in Kyoto to Future Generations

Presentation 1:

Differences in the Characteristics of Traditional and Modern Textile Material

—Focusing on Throwing and Weaving of Raw Silk

Date: Thursday, February 13, 2020, 14:00 pm to 16:00 pm

Venue: Chiso Head Office, Hall (5th floor)

Noriko Hayakawa (Head of the Restoration Materials Section, Center for Conservation Science, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties)

Riyo Kikuchi (Senior Researcher of Department of Intangible Cultural Heritage, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties [at the time])

Participants: 11 who associating with producing textile

Presentation 2:

Restoration of *Kyōkechi-zome* (Plate-dyeing) Using Acrylic Plates with Digital Technology

Date: Friday, February 28, 2020, 14:00 pm to 16:00 pm

Venue: Chiso Head Office, Hall (5th floor)

Masae Bamba (Professor at Kobe Design University)

Participants: 12 who associating with producing textile

Summary

Materials and tools used with traditional textile techniques have changed dramatically in the late modern period. Chemical dyes have replaced natural dyes, silkworms have been improved to spin longer and thicker threads, and silk throwing, once performed by hand, is now mostly conducted by machines. Such changes in dyes, species of cocoon, and silk throwing and weaving techniques present major challenges in reproducing textile products before the modern period for technical research. The tools and materials used can largely affect the finishes of textile products. Although mechanization has increased the production efficiency, some colors and textures are no longer achievable.

In 2015 to 2017, Chiso reproduced the *Furisode Kimono* with *Noshi Bundle Design*, (the 18th century), which is designated as an Important Cultural Property of Japan. In this project, natural dyes were used to reproduce the original colors. The silk fabric for the kimono, however, was produced using cocoons of currently available species and with modern throwing and weaving techniques to reproduce the texture of the fabric from the Edo era as closely as possible. Differences in the texture and their effects on how the dyes develop color are the subject of our future research*.

In a research project conducted between 2017 and 2019 on the techniques of *okedashi shibori* (tie-dyeing using a bucket), we examined and documented the characteristics of the buckets, which are no longer manufactured, as well as the dyeing techniques, but did not restore the tools nor explore possible replacements for the tools**.

With the recent social trends of mass production and mass consumption coming to an end, re-examining the characteristics of tools and materials as well as the techniques for textile production is crucial to hand down the traditional skills to future generations in a better way. We hosted the two seminars, with invited by experts, where we reconsidered the possibilities of textile techniques.

The seminars were held within the framework of the Project to Support Creative Activities at Museums with the Local Community supported by the 2019 subsidy for the promotion of culture and arts granted by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan.

*Second Seminar: Traditional Japanese Dying—Colors and Techniques in *Institute for Chiso Arts and Culture Annual Report* (First issue) 2020, pp.52–61. Third Special Exhibition and Lecture: Chiso *Yūzen*—Reproducing the *Furisode Kimono* with *Noshi Bundle Design*, *ibid.*, pp.108–115.

***Okedashi Shibori*: Technique Succession Project by the Institute for Chiso Arts and Culture, *ibid.*, pp.84–85.

[Seminar]

Project for Rediscovering the Appeal of Vestment Culture in Kyoto

Date: Tuesday, February 25, 2020, 2:00 pm to 5:00 pm

Venue: Chiso Head Office, Hall (5th floor)

Presentation:

History and Culture of the Shinshū Ōtani-ha Branch of Shin Buddhism—focusing on the relationship between Himeji Semba Betsuin Hontokuji Temple and Higashi Honganji Temple
Wataru Andō (Director of Doho University Institute of Buddhist Culture)

Research Report:

Textiles and Garments at Himeji Semba Betsuin Hontokuji Temple, that Were Produced under Chikiriya Sōzaemon

Akihiko Yamaguchi (Chief priest at the Enshōji Temple), Monica Bethe (Director of the Medieval Japanese Studies Institute), and Yuriko Katō (Director of the Institute for Chiso Arts and Culture)

Summary

The seminar was conducted as a research report featuring over 100 textile products stored in Himeji Semba Betsuin Hontokuji Temple of the Shinshū Ōtani-ha branch. In preparing the report, we photographed items including *kesa* (Buddhist priest's vestments), religious vestments called *hōe*, and *uchishiki* (Buddhist altar clothes) from the late Edo era to the Taishō era and measured select items. Among the vestments in kimono wrappers, we identified 13 items that are considered to have been produced by Chikiriya Sōzaemon.

For future comparative research, we photographed and measured over 200 designs for vestments including *kesa*, and over 90 designs for *uchishiki* and *mizubiki* (Buddhist altar cloth under *uchishiki*) produced from the Edo era to the Taishō era, all preserved at Chiso, and also transcribed inscriptions for those items.

We invited Wataru Andō who has been engaged in investigating cultural properties preserved at Hontokuji Temple and exhibiting historical materials to the public since 2009. At the seminar, he talked about the close connection between Hontokuji Temple and Higashi Honganji Temple and its history, as well as cultures adopted from the Imperial Court and the relationship between the Imperial Court and the local community. In the research report session, Akihiko Yamaguchi shared his knowledge of Buddhist vestments such as *hōmo* (ceremonial vestment), *gojōgesa* (five-panel *kesa*), *tatamigesa* (folded vestment stole), and *wagesa* (circular vestment stole), explaining about the occasions for which these vestments are worn as well as, the colors and the fabrics used for different purposes, and their

meanings. Monica Bethe focused on the motifs specific to the Shinshū Ōtani-ha branch, such as *yatsufuji* (eight bunches of wisteria) and *botan* (tree peony), while referring to their varying shapes and weave structures and comparing them to historical materials preserved at Chiso.

The seminar had 27 participants including researchers in vestment culture and textiles, priests, temple workers, representatives of Buddhist vestment manufacturers, and those from textile product manufacturers. Aiming at providing regional cultural resources concerning vestments and their historical and cultural backgrounds, we will continue to conduct comparative research on historical materials preserved at temples of the Shinshū Ōtani-ha and at Chiso, organizing the materials systematically, and clarifying the activities conducted by vestment purveyors.

This project was conducted within the framework of the Project to Support Creative Activities at Museums with the Local Community that is supported by the JFY 2019 subsidy for the promotion of culture and arts granted by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan.

Co-researchers of the project (listed in random order, with their honorific titles omitted)

Akihiko Yamaguchi (Chief priest at the Enshōji Temple)
Kaoru Aoki (Visiting researcher at Doho University Institute of Buddhist Culture)
Monica Bethe (Director of the Medieval Japanese Studies Institute)
Motoko Miyao (Medieval Japanese Studies Institute)
Yūko Koide (Associate Professor at Osaka University of Arts [at the time])
Tomoko Hayashi (Curator at The Museum of Kyoto)

[Special Exhibition and Lecture]

Fifth Special Exhibition and Lecture

Exploring the Future of Japanese Culture with Chiso Collection Chiso and Artistic Textiles —Beauty and Techniques Expected for the New Era

Date: Saturday, July 27, 2019, 2:00 pm to 3:30 pm

Venue: Chiso Head Office, Hall (5th floor)

Summary

The craft field of artistic textiles predominated from the Meiji era to the early Shōwa era, a time of rapid modernization and westernization. Japanese ornamental textiles include designs similar to paintings expressed using dyeing and weaving techniques and are mounted on large frames or *tsuitate* (panel screens), which were produced as western interior ornaments and also gained popularity abroad.

While the textile industry in Kyoto was being hit by major social changes, Chiso developed the traditional techniques of *yūzen* dyeing and embroidery with the invention of velvet *yūzen*-dyed textiles and the appointment of Japanese-style painters to lay the foundation of artistic textiles.

We invited Aya Ōta from the Museum of the Imperial Collections owned by the Imperial Household Agency. She spoke about the prosperity and historical significance of artistic textiles with a focus on works produced by Chiso under the command of the Ministry of Imperial Household at the time.

The works we exhibited include *Eagle* (1903) by Konoshima Ōkoku, which is the original painting of the velvet *yūzen*-dyed textile *Storm* in *yūzen*-dyeing on velvet (1903) delivered to the Ministry of Imperial Household at the time. The draft of embroidery on *Hall crabapples and Peafowls* (about 1882), and photographic materials.

Lecturer:

Aya Ōta

Aya Ōta is a senior researcher (at the time) at the curator's office of the Museum of the Imperial Collections owned by the Imperial Household Agency. She was born in Tottori Prefecture and graduated from the Department of Cultural Heritage Studies in the Faculty of Letters, Nara University. After working part-time at the Nara National Museum, she took her current post. She specializes in the research and preservation of artworks inherited from the Imperial House of Japan and also joined the repair project for the 30-scroll set of *Dōshoku Sai-e* (Colorful Realm of Living Beings). Her research papers and books include *Ito Jakuchū sakubin shū* (Tokyo Bijutsu Co.,Ltd), *Oguri Hangan to Terutehime* (Tokyo Bijutsu Co.,Ltd), “Ito Jakuchū to Dōshoku Sai-e” and “Jakuchū byōsha no myōgi” in *Ito Jakuchū Dōshoku Sai-e zen sanju fuku* (Shogakukan Inc.), “Kinsei kyūteibi no ninaite to sokojikara” in *Kyoto Gosyo : recalling great treasures of court culture* (The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.), and “Bankoku ezu Byōbu ga motarashita seika to kadai” in *Light and shadows in Namban* (Nikkei Inc.).